

朋友だより

今年夏の猛暑は異常でしたが、師走ともなると冬らしい寒さがやってきました。皆様如何お過ごしですか。

今月、沖縄へ行く機会がありました。これを機に、沖縄問題について考えてみました。

来年が皆様にとって良い年でありますよう、祈念しています。

2010年12月

(有)コンサルタント朋友
代表取締役 奥長弘三



沖縄問題は私達自身の問題である



沖縄県知事選候補者 伊波さんの本を読む

今年 11 月に沖縄県知事選がありました。それに立候補した伊波洋一さんの著書『普天間基地はあなたの隣にある だから一緒になくしたい』(かもがわ出版 2010 年 10 月)を読みました。同書の主張の概略は次の通りです。

普天間飛行場が危険であることで日米両国政府間で全面返還が合意されたのが 1996 年。返還する条件として「撤去可能な海上ヘリ基地」を建設するというものだった。

海上ヘリ基地を辺野古先につくる案だったが、そこは、沖縄でも特別に自然環境の良い場所であることもあり、現地の反対で代替基地の建設は進んでいない。

2003 年に著者が普天間市長に就任して以来、7 年間日米両国政府に基地の危険性とその安全対策を訴え続けるが、全く改善されない。その間三度にわたりアメリカに行き、また米国側の資料も調べることで、アメリカの動きの輪郭がはっきり浮かび上がる。

2001 年 9 月の世界同時テロ以降アメリカ軍の戦略は大きく変わった。米軍再編計画である。

グアムに巨大基地を建設し、沖縄の海兵隊はすべて 2014 年までに移転することにしている。普天間のヘリコプター部隊も全部グアムに持っていく。この計画は既に実施されており、日本政府はグアム移設費用の 70% (7000 億円)を負担している。

ところが日本政府は、お金を出しているにもかかわらず、グアム移転計画の詳細を国会にも報告していない。

海兵隊を沖縄から、グアムに移転する利点は、アメリカ側資料によると、次の 3 点が挙げられている。

- 1.活動の自由
- 2.韓国、フィリピン等の同盟国との軍事訓練は日本ではできない

3.グアムからでも迅速に対応できる

一方、代替地とされている辺野古での新基地は、普天間基地とは全く別の前方展開作戦の新基地の建設が計画されている。当初 (1996 年)は、1300m の撤去可能なヘリポートだったのが、現在 2000m 級の滑走路が 2 本となっている。

これらのことから、著者はアメリカ軍再編の現在こそ、普天間基地の無条件閉鎖、国外移設が可能な絶好の条件が成熟していると力説している。

次の言葉は、著者の切実な叫びです。

“米国内の情報を分析して、日本と沖縄のためにどう活用するのかを考えるのが政治家や官僚の仕事のはずです。でも日本政府の官僚たちがやっているのは、つじつま合わせでしかありません。” (同書 P. 82)

辺野古地区の反対闘争の 現場にふれる

上記の伊波さんの本を読んだあと、沖縄を訪問する機会がありました。文京革新懇主催の「安保を考える沖縄の旅」が 12 月 5 日～7 日の 3 日間開催され、ご一緒させていただきました。一週間前の知事選で伊波さんは、46% を獲得され、基地問題の解決を願う沖縄県民の意思の大きさを感じます。

旅の 2 日目に辺野古地区新基地建設反対運動で座り込みを続けている人達と交流しました。

2004 年 4 月那覇防衛施設局の辺野古ボーリング調査に対し阻止行動を開始し、翌 2005 年 9 月ボーリング調査のやぐらが撤去され阻止行動が勝利するまでの海上での体を張ったの闘いのお話を伺いました。それ以降、今日に至るまで座り込みの反対運動を続け、杭一本打たせないで、がんばっているのですが、長期間の反対運動が可能なのは、全国からの応援があったからだとの話は印象的でした。

政府は辺野古新基地建設について、地元で正確な情報を流していません。反対闘争が強化することを恐れているのです。天然記念物ジュゴンの保護を求めてアメリカ本国で起こされたジュゴン訴訟で日本政府が沖縄に嘘を言っていたことが明らかになったそうです。新基地建設のマイナス材料は徹底して隠そうとする日本政府のやり方に現地は批判を強めています。

座り込みテントの100mほど先から、広大なキャンプ・シュワブが展開しています。沖縄に派遣された海兵隊の若い兵士がシュワブに駐留し、ジャングル戦闘訓練センターなどで新兵としてすごかれます。到着した直後は若者らしい清々しい眼をしていたのが、2~3ヶ月の訓練のあとには、うつろな眼の人殺しを何とも思わない兵士に変わっていくとのこと。

現地で入手した、大浦湾の生き物マップのカラー冊子は、辺野古の先の大浦湾に生息する生き物の多様性を見事に表現していて、思わず息をのみます。この冊子を見ると、この地に新基地を建設して、これらの生き物を死滅させることは絶対に認めることができないという気持ちになります。

1945年の沖縄戦のお話を聞く

最終日の第3日目は、平和記念資料館、平和の礎、ひめゆりの塔など見学しながら、22万人の犠牲者を出した沖縄戦のお話を聞きました。

戦争末期の1945年4月~6月までの3ヶ月間、沖縄本島中部から南部にかけて、日米両軍は総力をあげた死闘をくり広げます。米軍は物量作戦によって空襲や艦砲射撃を無差別に加え、おびただしい数の砲弾を撃ち込み、「鉄の暴風」で沖縄の風景を一変させます。

これは本土決戦の時間かせぎの犠牲になったのですが、民間人を巻き込んだことで悲劇を一層大きくします。本土の犠牲になって戦われたこの沖縄戦の実相が、本土の人間に殆ど知られていないのは残念です。

平和記念資料館設立理念は次のようになっています。

(前略) 沖縄戦の何よりの特徴は、軍人よりも一般市民の戦死者がはるかに上回っていることにあり、その数は10数万に及びました。(中略) 私たち沖縄県民は、想像を絶する極限状態の中で戦争の不条理と残酷さを身をもって体験しました。

この戦争の体験こそ、とりもなおさず戦後沖縄の人々が、米国の軍事支配の重圧に抗しつつ、培ってきた沖縄のこころの原点であります。

“沖縄のこころ”とは、人間の尊厳を何よりも重く見て、戦争につながる一切の行為を否定し、平和を求め、人間性の発露である文化をこよなく愛する心であります。

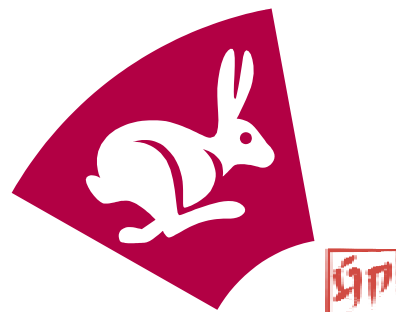
私たちは、戦争の犠牲になった多くの魂を弔い、沖縄戦の歴史的教訓を正しく次代に伝え、全世界の人びとに私たちのこころを訴え、もって恒久平和の樹立に寄与するため、ここに国民個々の戦争体験を結集して、沖縄県平和記念資料館を設立いたします。

1975年(2000年4月一部修正) 沖縄県

大勢の中高生が修学旅行で資料館を熱心に見学しているのは救いです。彼らが正しく戦争体験を受け継ぐことを祈っています。

戦後65年経つのに沖縄は今でも戦争の後遺症に悩まされています。私を含め本土の人間は、沖縄のことを知らないし、無関心であることを反省しています。沖縄は本土の犠牲にされただけでなく、現在も基地問題で犠牲を強いられている事実を本土の人間が広く共有することが大切です。

伊波さんの本のタイトル「普天間基地はあなたの隣にある、だから一緒になくしたい」の意味の重さを改めてかみしめています。



2010年 一年をふりかえって

今年も残りわずかになりました。

「朋友だより」の上で、この一年をふりかえってみます。

中小企業憲章の勉強会への参加が今年のスタートでした。その中小企業憲章は、6月18日に閣議決定され、時代の転換点を飾るにふさわしい出来事となりました。しかし、その後の政治経済の動向を見ていると、手放して楽観できるものではなく、一段と混迷を深めているようです。

ではどのような社会を展望し、その中で中小企業として何をすれば良いかを考えるのが、今年後半のテーマでした。長期にわたる市場万能主義の呪縛から解放されましたが、地域経済は極度に疲弊し、中小企業の経営は困難の最中にあります。

105号(2010年8月25日付)で扱った「持続可能な日本社会を築く」が私なりの結論でした。ここにこそ、中小企業の生きる道があると確信しています。またこのような不透明な社会の中では、中期の経営ビジョン(目標)の作成が不可避の課題であることを明確にすることができたのは、一つの成果でした。

今月の107号で沖縄問題を取り扱いました。今回沖縄のことを勉強して改めて気づいたのですが、沖縄は本土の犠牲になったにもかかわらず、私たちは沖縄のことを知らないし、無関心なのです。沖縄の問題は沖縄だけに押しつけるのではなく、日本全体で考えるべきことです。

私が以前、和歌山県田辺市で見つけた次の言葉は真実だと思います。

過去を知らなければ、
今日は生きていくことが出来ても、
未来は創造できない。

中小企業も重要な担い手となって、明日の日本を築いていく上で、私たち中小企業経営者にとって沖縄問題は、他人ごとと考えるわけにいかないと思っています。

最後になりましたが、来年が皆様にとって良い年であることを祈念しています。

奥長弘三

* ~ あとがき ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ *

朋友だより 107号をお届けいたします。

今年のNHKの朝のドラマ「ゲゲゲの女房」を楽しみました。妖怪等にはあまりご縁はなかったのですが画面に垣間見えるほのぼのとした姿とドラマの中の昭和への懐かしさで見入ってしまいました。皆が貧しかったけれど人々の繋がりも温かく他人への思いやりが強い時代だったと感じました。その“ゲゲゲの～”が今年の流行語年間大賞に選ばれた一方で“無縁社会”という言葉が10位までに選ばれたのも今の世の中の残念な実態を伝える言葉として印象に残りました。来年は明るい話題が人々の縁を結びますように望んでおります。(野上)



朋友

有限会社 コンサルタント朋友
〒113-0034 東京都文京区湯島3-23-8第六川田ビル201号
TEL . 03-3833-6025 (代) FAX . 03-3833-6035 .
URL : <http://www.consultant-hoyu.co.jp>